

聖堂を彩る王侯貴族の墓碑

「旧約聖書」の出エジプト記には、「聖なる像を刻んではならない」※1と記されている。そのため、キリスト教では長らく墓像は制作されなかつたとされる。一方、西ヨーロッパには古代ローマから続く彫像の伝統があった。死者を記憶にとどめ追悼することは人間の普遍的な営みでもある。そのため、6世紀ごろにはヨーロッパの広い範囲で王侯貴族の間で個人の彫像を刻んだ墓碑がつくられていたと考えられる。さらに12世紀ごろになると、「ジザン」と呼ばれる死者の横臥像が、聖堂内の礼拝堂に安置されるようになった。

最大最古の「ジザン」が残るサン・ドニ修道院聖堂

サン・ドニ修道院聖堂は、パリの守護聖人である聖ドニを祀る聖堂として7世紀に創設。その後、フランス王家の廟堂として、10世紀から18世紀にかけて王族がここに埋葬された。ゴシック様式の礼拝堂は、「神は光なり」の理念を具現化したもので、ステンドグラスの光を受けた王家の墓像が並んでいる。そのなかでも、現存する最古かつ最大の「ジザン」とされるのが、13世紀に制作されたダゴベルト王※2の墓碑である

魂の救済を示す墓碑彫刻

墓碑の下方には横臥して祈るダゴベルト王が表され、中段から上段にかけては聖ドニにより救済される魂が小型の裸体像で表現される。これは、罪によりひとたびは地獄へと導かれたダゴベルトが、聖ドニ、聖マルタン、聖モリス※3、天使らの助けて段階的に上昇し、最後は天国に至る過程を表している。最下部ではダゴベルト王の息子クロヴィス2世と王妃マティルドが祈りを捧げる。これらは隠者ヨハネの幻視※4に基づき、メロヴィング朝(481~751年)の正統性と、王家とサン・ドニ修道院聖堂との結びつきを顕彰する意図も認められる

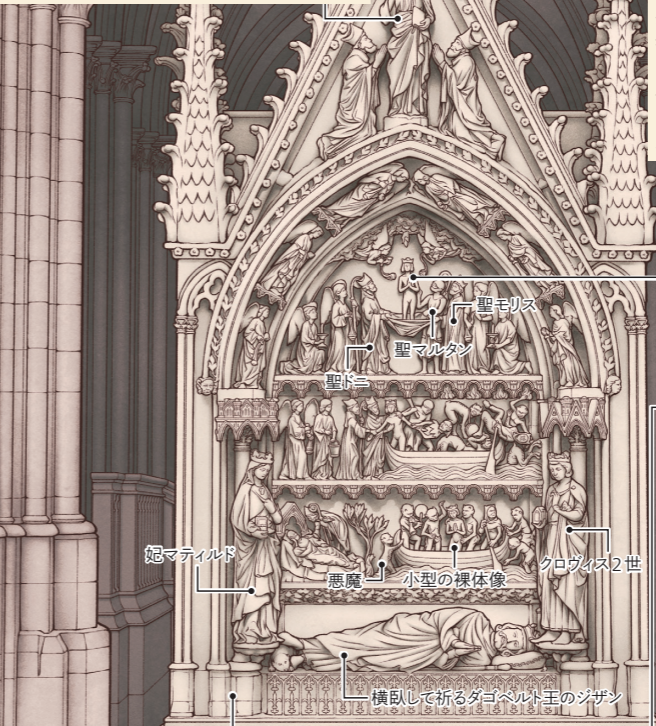
聖堂ゆかりの人物が眠る地下墓所

地下墓所は、聖堂にゆかりのある人物が眠る場。聖堂建造の由来となった、初代パリ司教聖ドニ(ディオニュシウス)やその弟子たち、12世紀に修道院の繁栄に貢献した院長シュジュールが眠っている。しかしフランス革命※5の動乱で聖堂は大きく破壊。現在はほかの骨も混ざった状態になっている

ダゴベルト王のジザン(13世紀)

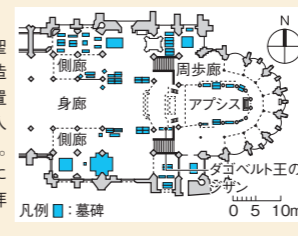
聖母の胎内をかたどる聖堂建築

聖堂の十字形の平面は、キリストの磔刑を象徴すると同時に、信者を守護する聖母マリアの胎内をかたどった空間であるともみなされた。聖堂内に埋葬されることは、死後の救済(キリストのごとき復活)と、聖母の胎内への帰帰という2重の意味を有していた



聖堂の頭部が墓碑の1等地

基本的に聖堂は、頭部(アプシス)を聖地エルサレムの方向(東)に向けて建造される。内部では、エルサレムに近い位置ほどヒエラルキーが高く、頭部付近から入口に向かって順に墓碑が形成されていた。聖堂の創始者であるダゴベルト王も上位に安置された。やがて聖堂には複数の礼拝堂が併設され、拡張されていく※6



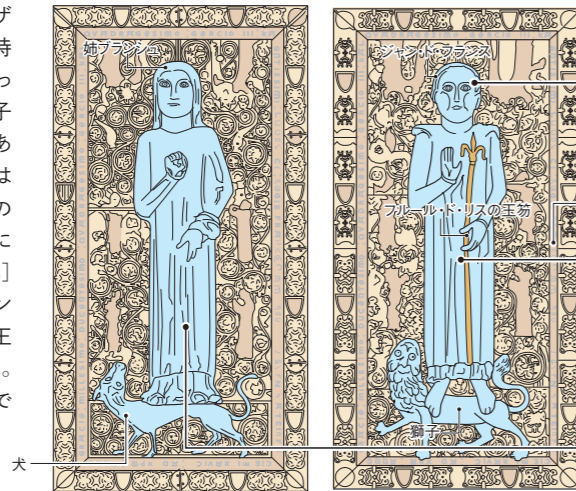
墓所建造のための寄進

キリスト教の聖堂は、もともと墓所として建造された。墓所建造のために王侯貴族は財産の一部を寄進※7。また、永代供養のために財産を残し、祈りをささげる修道士などを雇った

金属製の鮮やかなジザン

ジャン・ド・フランスと姉ブランシュのジザン(13世紀)

サン・ドニ修道院聖堂にはダゴベルト王以外にも、さまざまなジザンが安置されている。なかでも特に見事なのは、若くして亡くなった聖王ルイ(ルイ9世)の息子ジャン・ド・フランスのジザンである。現存するジザンのほとんどは石造だが、ジャン・ド・フランスのジザンには、高度な金工技術による精緻なエマールコ装飾※8が施されている※9。ジザンは手間と費用がかかるため、王侯貴族に限られた特権であった。さらに、これを荘厳にすることで権威が強調された。



見開かれた両眼は復活を待ち望む心を表し、左手にはフランス王家の紋章であるフルール・ド・リスの王笏(王権の象徴の杖)を持つ。長衣の足元には、力と権力を象徴する獅子が控えている

聖堂の扉

ジャン・ド・フランスは1歳で死亡したため、三分割埋葬【下段】は行われなかったと考えられる

姉ブランシュのジザンも同様に荘厳に表され、共に天国を象徴する聖堂の扉に囲まれている

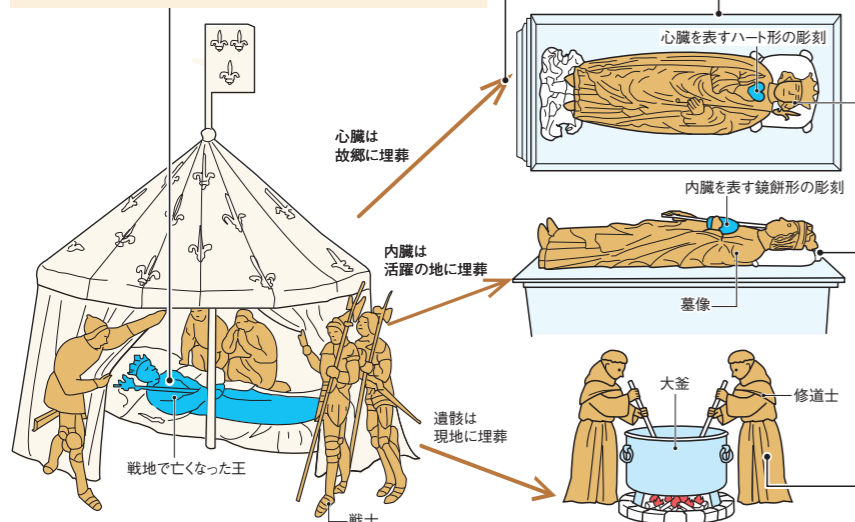
遺体を分割して埋葬する風習の広がり

11世紀以降のキリスト教圏では、国家(土地)をキリストの身体と同一視する概念が確立され、埋葬地が重視されるようになった。また、同時期に始まった十字軍の遠征を通じ、遠隔地で亡くなったキリスト教徒の魂を救いたいという教徒らの思いが高まったことも背景となり、第2回十字軍(12世紀ごろ)以降、北ヨーロッパを中心に「三分割埋葬」と呼ばれる埋葬方法が王侯貴族の間に広まり、フランスやイギリスにも伝わった。ただし、イタリアやプロテスタント諸国ではもともとゲルマンの風習だったためか、この風習は軽視された。

遺体を心臓・内臓・遺骸に分けた三分割埋葬

遺体は、心臓・内臓・それ以外の遺体(以下、遺骸)の3つに分割され、心臓は故郷に、内臓は活躍の地(故人が特に思い入れのある土地)に、遺骸は現地に埋葬された。また、墓像もそれぞれの埋葬場所に建てられた。こうした習慣は、古くはチュートン人(ゲルマン人)の埋葬習慣に由来するとされる

遺体の解剖処理は、基本的に修道士が担ったとされるが、戦地では戦士たちが解剖に携わった。分割埋葬によって遺体処理の技術が発達し、やがて西洋医学の発達に寄与することになった



三分割埋葬を行う際に最も重視されたのは、古来、魂の宿る部位とされてきた心臓であった※10。中世のキリスト教では、12世紀以降に確立した聖心信仰※11と相まって、心臓の絶対的優位が確立したとみられる。フランスに多く存在する聖堂『サクレ・クール』も聖心信仰が名前の由来である

心臓以外の内臓や遺骸も身体の一部として重要視されたが、腐敗しやすい腸や臓物などの部位は軽視された

遺骸は、大釜に油で煮て処理する場合と、切断して処理する場合があった。心臓はハート形、内臓はまるで鏡餅のような形状で胸に載せて表されるのに対し、遺骸の墓には何も載せられていない場合が多い

解説:小池寿子、イラスト:NoshTa(西太一)

※6 さらに聖堂内部が死者で満たされると、教会周辺にも墓地が形成されていった【84頁】 | ※7 聖堂などに金品や土地、資材を自発的に寄付・奉納する行為 | ※8 金属にガラス質の釉薬を焼きつける装飾技法。日本の七宝(しっぽう)に相当する | ※9 フランスのジザンはフランス革命の時期にその多くが失われた。失われたジザンのなかには、このような豪華な金工品のジザンも多数あったと思われる | ※10 プラトンによると、霊魂は、「①頭部に宿って理性をつかさどる不死なる魂、②心臓を有する胸部に宿って知性と情念をつかさどる死すべき魂、③肝臓が機能する腹腔で動物的本能をつかさどる魂」に3分割して示された。また、アリストテレスは「霊魂は1カ所にただ1つしかなく、内なる熱によって温められ、身体の真ん中にある心臓に座を占める」とした | ※11 心臓を、人間に対するキリストの愛の象徴として崇敬する信仰のこと

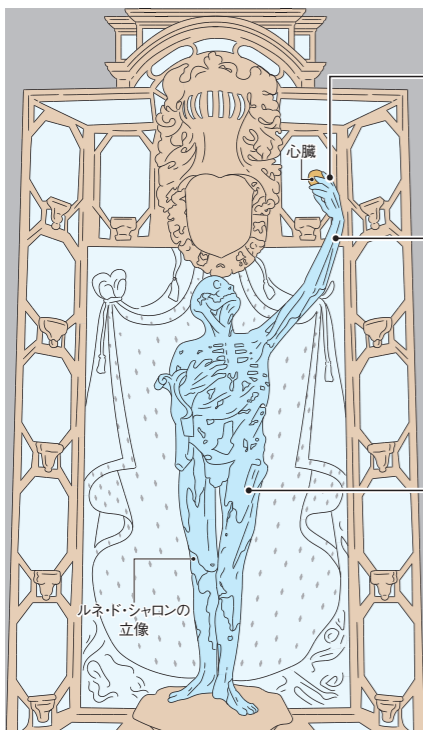
※1 キリスト教において最も重要な預言者の一人であるモーセが、神(ヤハウェ)からシナイ山で授かった10の戒律『十戒』のなかの第2戒律(偶像崇拝の禁止) | ※2 在位: 628~637年。メロヴィング朝の王 | ※3 聖ドニはローマから派遣された司教団の一人で、最初のパリ司教としてキリスト教を広めた。パリの守護聖人として知られる。聖マルタンはローマ帝国の軍人からキリスト教に改宗し、フランスのトゥール司教となった。殉教せずして列聖された最初の聖人。聖モリスはローマ帝国軍の将軍としてテレー軍団を率いたキリスト教の聖人 | ※4 『ダゴベルトの事績』(9世紀)によれば、ダゴベルトの死の際、ボワティエ司教は隠者ヨハネと出会い、ヨハネは次のような幻視を見たと言った。王の死の日、その魂のために祈りをささげていると、ダゴベルトが悪魔たちに護衛され、活火山へ向かう船に乗せられている光景が現れた。しかし王が、生前に惜みなく恩を捧げてきた聖ドニ、聖モリス、聖マルタンに呼びかけると、彼らは雷鳴と稲妻の中から現れてダゴベルトを救い出し、アブラハムの懐へと導いた | ※5 1789年にフランス王国で起きた革命。ブルボン絶対王政を倒した市民革命で、封建的特権の廃止、人権宣言、王政廃止、憲法制定などを実現した。特権を持つカトリックへの反発により、宗教の国家統制や脱キリスト教化が進んだ

朽ちゆく肉体を墓像に刻むトランシ

解剖学の進歩とその知見を反映した死者像

三分割埋葬における遺体処理や墓碑制作に際して、とりわけ重視されたのが、魂の宿りの場とされた心臓であった [81頁]。そのため、心臓の埋葬地に置かれる墓碑には、芸術的に優れた彫像が数多く制作された。なかでも注目すべきは、ルネ・ド・シャロン [下図] の立像トランシであり、その写実的な腐敗表現やポーズには、16世紀以降に発展した解剖学の影響を見て取ることができる。

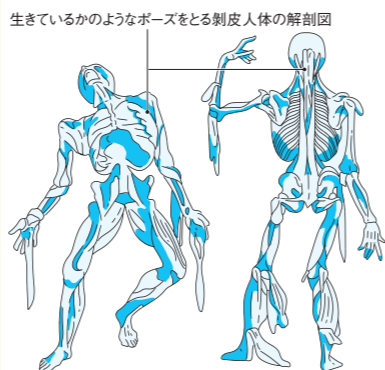
ルネ・ド・シャロンの立像トランシ (16世紀)



ネーデルラントの名家ナッサウ=ブレダ家およびオランニエ (オランジュ) 公家の子息であったルネ・ド・シャロンは、戦傷のため、1544年に25歳の若さでこの世を去った。三分割埋葬の慣例に従い、彼の遺体から摘出された心臓は、まだ若かった妻の郷里であるロレーヌ地方のサン=ティエヌ聖堂に埋葬された

墓所の上には、朽ち果てた姿で立ち上がり、高く掲げた左手に心臓を握るルネのトランシが据えられている

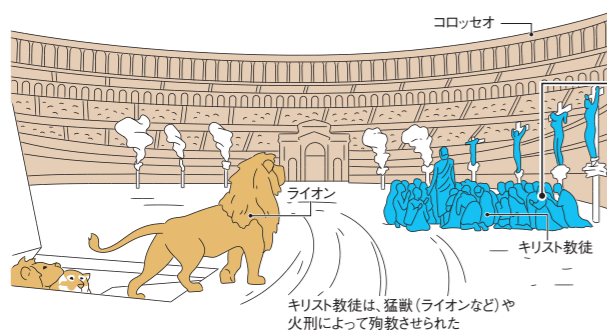
1543年、解剖学者アンドレアス・ヴェサリウスの著書『人体の構造 (ファブリカ)』には、生きているかのようなポーズをとる剥皮人体の解剖図が掲載されている [右図]。これ以降、挿絵付きの解剖学書が急速に普及していった。このような背景を踏まえてルネのトランシを見ると、当時の解剖学的知見が明確に反映されていることが分かる



見世物 (スペクタクル) としての殉教精神

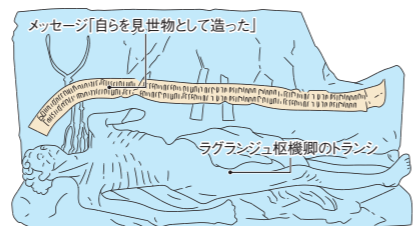
朽ちゆく遺体を、トランシを用いて公に示すことは、迫害を受けた古代ローマ時代のキリスト教徒の精神性に根差す習慣であったとも考えられる。古代ローマでは、信仰を貫いたキリスト教徒が見世物 (スペクタクル) としてコロッセオなどで殉教 [※7] した歴史があった。被葬者はトランシによって自らの死を見世物化することで、先人たちの精神を受け継ぐ敬虔な信仰心を表現しようとしたのだと考えられる。

古代ローマ時代の見世物的な殉教のイメージ



キリスト教徒は、猛獣 (ライオンなど) や火刑によって殉教させられた

14世紀のラグランジュ枢機卿のトランシ [下図] には、「自らを見世物 (スペクタクル) として造った」と記されている。自らの死を人々にさらすことで信仰の強さを示そうとする精神性が受け継がれているのであろう



解説: 小池寿子、イラスト: NoshTa (西太一)
※7 信仰する宗教のために自分の命を捨てること

おぞましいトランシをつくった死者の思い

「罪は告解によって軽減される」というカトリックの思想を背景に、腐敗する肉体を墓像として人目にさらすことで、神への告解を示し、天国への救済につながると考えられた。また、多くの遺言書には、「どうか罪深き私に祈りを捧げてくれ。腐敗死骸像をしかと見よ。お前もやがてこうなるのだから」といった文言が見られる。トランシを見る者に対して、死者 (自身) への追悼の祈りを促していたことがうかがえる

ペストなどの疫病で死者数が急増した14世紀後期ごろから、ジザン [80頁] の新たな表現形態として、「トランシ」 [※1] と呼ばれる墓像がカトリックで流行し始めた。トランシとは、腐敗し、干からび、あるいは白骨化した姿で表された死者の彫像であり、イギリス・フランス・ドイツなどのカトリック圏を中心に、16世紀ごろまで王侯貴族の墓に制作されたものである。醜く朽ち果てる自身の肉体を墓に刻むことで、「謙遜の美德」と「罪の告解」 [※2] を表明し、最後の審判に際して煉獄 [77頁] からの救済を願う意図があったと考えられる。これは、後のメメント・モリ [※3] に通じる。

鮮やかな職衣をまとった上段のジザン

墓像の上段には、職衣をまとった等身大のチチリが、彩色を施した丸彫りの姿で横たわる。頭部は天使に支えられ、足元には祈禱書を置いてひざまづく2人の修士像が伴っている

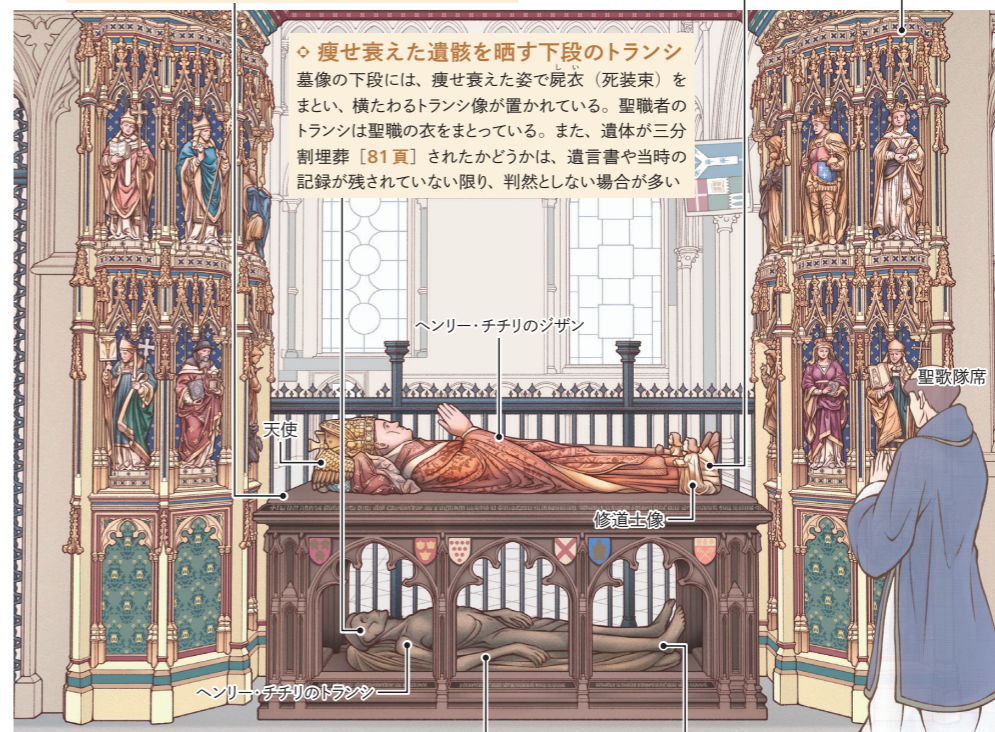
聖歌隊席に接する墓像

墓像は、聖堂の北翼廊に近い聖歌隊席に接し、いわば聖堂の心臓部ともいえる重要な位置に配されている

ヘンリー・チチリの2段式墓像 (15世紀)

イギリス特有の2段式墓像

イギリスでは、1つの墓所にジザンとトランシの両方を彫り刻む2段式の墓が特徴的。その代表例がヘンリー・チチリ [※4] の2段式墓像である。チチリは亡くなる20年前にカンタベリー大聖堂の主要部にこの墓像を設置するよう指示した [※5]



痩せ衰えた遺骸を晒す下段のトランシ

墓像の下段には、痩せ衰えた姿で屍衣 (死装束) をまとい、横たわるトランシ像が置かれている。聖職者のトランシは聖職の衣をまとっている。また、遺体が三分割埋葬 [81頁] されたかどうかは、遺言書や当時の記録が残されていない限り、判然としない場合が多い

トランシと対をなすエフィジー

朽ちゆく遺体を表現したトランシとは対照的に、生前の容貌に似せて表された死者の肖像は「エフィジー」と呼ばれる。葬儀で「王の肖像」 (エフィジー) を用いる慣習は、エドワード2世 (1327年没) に始まる。これは、腐敗防止のために内臓を除き香料を詰めた遺体に代えて、王の容貌に似せた葬儀用肖像 (エフィジー) が葬列を飾ったことに由来する。以降、この慣習は断続的に行われ、シャルル6世 (1368~1422年) の葬儀以降、フランス王家の壮麗な葬送行列を飾るようになった

トランシの発注カタログも存在した

トランシや葬送儀礼用のエフィジーの製作には宮廷芸術家関与しており、発注用の見本帳まで存在していた。クライアントはそれを参照しながら、死後の経過日数を指定して注文していたという。たとえば、カトリーヌ・ド・メディシス [※6] は、自身のトランシを当時パリやフィレンツェで活躍した彫刻家ジローラモ・デッラ・ロピアに依頼している

※1 ラテン語 transire (trans「超えて」+ire「行く」) に由来し、12世紀~16世紀にかけて「死にゆく」「通り過ぎる」を意味した。名詞 transi または transiz は、死者を指す語として用いられた
※2 カトリックにおいて、洗礼後に犯した罪を告白し、神の許しを得ること
※3 メメント・モリ (死を忘れるな) という言葉自体は12世紀前後から宗教文学に登場する
※4 1362~1443年。国王ヘンリー5世に仕えた第62代カンタベリー大司教
※5 イギリスでは生前に聖堂内に小礼拝堂を寄進し、遺言と遺産に基づいて死後のミサを執行する慣例がある
※6 アンリ2世の王妃。王の死後、摂政として16世紀中期のフランスの実権を握った